# 平成30年度 月刊 校長通信2号



(生徒・保護者版)

H30.5.25(5月号)



### 俊英NOW

●5月14日 信州プロレス グレート☆無茶さん 来校



INC長野ケーブルテレビ「グレート☆無 茶の無茶するしかない? | 集録のためプロ レスラー グレート☆無茶さんが来校しま した。頑張っている若者たちを応援する番 組。本校のダンス部を取材しました。番組 の恒例で、最後に部長西沢創優君が目標を 叫び「無茶腹」にパンチを入れました。 放送日 5 月 26 日 (土) ~6 月 1 日 (金) 平日 = 9:30、12:00、18:30、21:30、22:15、  $23:15 \pm B = 8:30, 12:30, 15:15, 20:00,$ 20:45,23:30

### ●調理同好会 地道な活躍

調理同好会は、班長渡邉渉太君のもと顧問原美奈 子先生とともに地道に活動しています。牛乳消費 拡大をめざす東海酪農業協同組合連合会主催「ミ ルク料理レシピコンテスト」に応募し、多数の応 募の中から最終10作品に選ばれ入賞しました。 皆さんもこのレシピに挑戦してみよう。





### ミルクソース

- 11 ブロックベーコンを1cm幅に切る。ブロッコリーは小房に分けて茹でる。 玉ねぎを千切りに、しめじを小房に分ける。
- フライパンにバターを熱して、玉ねぎ・しめじ・ベーコンを炒める。 塩・白胡椒で味付けする。小麦粉を加えて更に炒める。
- 4乳を入れてとろみがつくまで煮つめ、仕上げにとろけるチーズを入れ、ブロッコリーを加える。
- 4 フライパンに油を入れ熱し、玉ねぎが透明になるまで炒め、コーンと野沢菜を入れて更に炒める。
- 4にご飯を入れて塩·白胡椒で味付けし炒める。
- ⑥ フライパンにバターを溶かし、⟨A⟩で半熟のプレーンオムレツを作って、ご飯の上に乗せる。
- 対
  ミルクソースをオムライスの上にかける。
- パプリカを星型にくりぬき、飾る。

### 校長ESSAY

## 小澤征爾のこと

~ ベートーヴェン「交響曲第九番」の思い出 ~

2002年の松本のサイトウキネンフェスティバルは、千人の合唱団員を一般公募してベートー ヴェンの「第九」をやることになった。私は歌がとても下手であるが、小澤征爾の指揮で歌えるな んて一生の記念になると意を決し、松本までオーディションを受けに行った。課題曲は「赤とんぼ」だった。カラオケ以外、人前で独唱するなんて生まれて初めてであり、気合とは裏腹に「ゆうやーけ、こやけえの」の「けえの」と音が上がるところで緊張のあまり音をはずした。ひどいものだったが、なぜか合格した。あとで聞いたら、男声合唱は数が少ないので全員合格だったとか。

練習は、半年続いた。千人の合唱というのは本当にすごい。まわりが皆プロなみで「ボーボー」と低音が鳴り響き、ド素人の自分の声なんか自分にさえ聞こえない。こんな音の洪水の中で何度か全身を鳥肌が渡っていく体験をした。(これはくせになります。)小澤征爾が練習に来たのは、公演が間近のたった1回。しかし、この1回で合唱団は、その迫力に完全に魅了された。エネルギーというか、オーラというか、そんなものが全身からあふれ出して合唱団を飲み込んでしまう。「この人は指揮をしているのだろうか。それとも踊っているのだろうか。」・・・そんな感じだった。

本番の日を迎えた。ところが、最終リハーサルにやって来たのは若い代理の指揮者だった。小澤征爾はかぜで体調がわるく、本番まで静養するとのこと。代理の指揮者からは、小澤征爾からの伝言があり、細かい指揮の最終チェックが行われた。小澤征爾のあの神がかり的な指導をもう一度受けられるものと期待していたのでかなりがっかりした。というわけで、小澤征爾の指揮での演奏はぶっつけ本番になったのだが、そこでとんでもないことが起こったのである。

合唱部分(第4楽章)はとどこおりなく進んで、中盤の山場、二重フーガの直前まできた。ここで、星々の彼方に神がいることを美しく歌い上げる部分がある。638小節目で「Welt(世界よ)!」と歌い、このあと休符が入る。この部分について、リハーサルのとき代理で来た若い指揮者は、小澤征爾の新しい指示を伝えていた。「この休符をはっきりさせるため、ここで 1 回合図をします。この合図でしっかり止めて下さい。そして次の合図で「Such ihn~(彼=神を求めよ)」と歌い出して下さい。」というような指示だった。そして本番、「Welt(世界よ)!」と歌ったあと、小澤征爾は、間を取れという合図をした。それがあまりにクリアーだったため、合唱団の1/3ぐらいが歌い出せという合図と勘違いして「Such」と出てしまったのである。他の1/3がそれにつられて自信なげにあとを追った。指示どおり正しく間を取ったのは残りの1/3ぐらいだったと思う。ちなみに自分は、2番目の1/3に属していた。その瞬間、小澤征爾の顔がさっと曇ったのがはっきり分かった。世界の小澤征爾の演奏においては考えられない初歩的なミスである。

演奏は、一応犬喝菜のうちに終わったが、私としては不本意な気持ちを拭うことができなかった。小澤征爾の表情に表れたあの一瞬の陰りが頭から離れなかった。金輪際、素人とやるのはごめんだ、などと思っているのではないだろうか。小澤征爾のキャリアに癒しがたい傷をつけてしまったのかもしれない。何となく後ろめたい思いが心によどんだ。

その3ヵ月後、注文してあった演奏のビデオが送られてきた。そこには、演奏が終わってそでに 下がった小澤征爾が映っていた。合唱団をずっと指導してきた先生を見つけると小澤征爾は「すみ

ません。すみません。」と連呼し、「ヴェールトってやるところ、やり方がはっきりしてなかったからいけなかった。」とつぶやいていた。彼は何の気負いもなく自然体で反省し、一生懸命あやまっているのだ。何と謙虚な態度なのだろう。心のわだかまりが一瞬にして解消し、そして、ますます小澤征爾を尊敬する気持ちになった。私の人生、「忘れがたい思い出」のひとつである。

